



2026.5.28

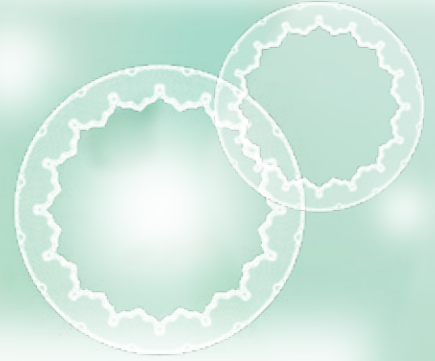
ふじた看護図アプローチ研究会「ふじかん」第32回研究会報告

日時：2026年5月28日（木）17：45～19：45

場所：対面（藤田医科大学）／Zoom

参加者：対面6名、Web6名 計12名

ファシリテーター：織田千賀子



●はじめに

今回は、対面参加6名、Web参加6名の計12名で実施しました。

アイスブレイクでは、「自分にあげたいご褒美」を紹介しました。美味しい食べ物、映画鑑賞、美術館などのご褒美が語られ、参加者同士の雰囲気が和らぐ時間となりました。

●1. 看護図アプローチの理論の学び合い

テキスト『見方・考え方を育てる授業デザイン—看護図アプローチの理論と実践—』の第2章第1節「オースベルの理論を取り入れる」をもとに、LTD話し合い学習を用いて学び合いました。今回は、オースベルの学習分類を手がかりに、受容学習・発見学習と、有意味学習・機械的学習の関係について話し合いました。

参加者からは、発見学習を取り入れれば自動的に有意味な学びになるわけではなく、グループ学習やワークシートを用いた活動であっても、学生が「提出するために埋める」「他者の記述を写す」ことに向かうと、機械的発見学習にとどまる可能性があることが話題になりました。一方で、看護基礎教育では、国家試験や臨地実習に向けて必要な知識が多く、説明や知識伝達をなくすことは難しいという意見も出されました。そのため、説明的授業や受容学習を否定するのではなく、学生が既習知識と関連づけながら理解を深められるように、発問や教材を工夫することが重要であると話し合われました。

また、学生の思考にスイッチが入るように、どこで考えさせ、どこで整理し、どこで知識を確認するのかを、授業全体の流れの中で設計する必要があることが共有されました。

●2. 小児看護学における実践共有

小児看護学の授業実践を例に、理論学習と実際の授業展開を関連づけて検討しました。取り上げられたのは、子どもの発達段階を踏まえたコミュニケーションを考える授業実践です。授業では、入院時の子どもと母親への初回接触場面をビジュアルテキストとして提示し、学生が看護師としてどのように関わるかを考えたことが報告されました。

看護師としての自己紹介を考える場面では、子どもの目線に合わせることや、母親にも丁寧に挨拶すること、子どもにわかる言葉で説明することなどが挙げられました。また、子どもが「お家に帰りたい」と言う場面では、学生が子どもの反応を受け止めながら、どのように声をかけるかを考えたことが共有されました。トミカで遊ぶ場面では、非言語的コミュニケーションについて、子どもに近づきすぎない、清潔感のある身だしなみ、母親からも信頼される態度など、多様な意見が出されたことが報告されました。

参加者からは、ビジュアルテキストや発問が、学生の既習内容を具体的な小児看護場面に結びつける手がかりとなっているという意見が出されました。また、レポートやリフレクションペーパーでは、「自分の考え」に加えて、「他者の意見から気づいたこと」や「新たに発見したこと」まで記載できると、学びをより深められるのではないかと提案もありました。今回の授業実践例では、学生がビジュアルテキストにある場面から状況を読み解き、既有知識と関連づけながら新たな気づきを得ていたことから、オースベルの理論に照らすと、有意味受容学習として捉えられる実践であったと考えます。

3. 看図アプローチの体験

今回使用したビジュアルテキストは、イラストレーターひじやともえさんの作品です。

【変換】では、「横断歩道」「雲」「足みたいなもの」「親子」「雲の濃淡」「スカート」「スクランブル交差点」などが挙げられ、細部に着目した読み取りが行われました。

【要素関連づけ】では、「白い部分と黒い部分の関係」に着目しました。「足みたいなものの上に雲がある」「横断歩道を渡っている人は、必ず白いところの上に足がある」「雲のような形の真ん中あたりが黒い」などの気づきが出されました。特に、「白いところの上に足がある」

という発見には参加者から驚きの反応があり、要素を関係づけて見ることで新たな発見が生まれることを実感する場面となりました。

【外挿】では、「雲のようにも人のようにも見える存在」に名前をつけました。「雲人間」「ふわふわ人間」「足長くも族」「くもっち」など様々な名前が出され、最終的に「くもっち」が選ばれました。名前をつけることで、最初は不思議に見えた存在が、親しみのあるものとして捉えられていきました。続いて、「くもっちは何をしているのか」を考えました。参加者からは、「夕立の前に足早に帰ろうとしている」「階段を上ったり下りたりしている」「じゃんけん大会をしている」「そろそろ出番だよと、別の世界に向かおうとしている」など、多様なイメージが生まれました。

今回の体験では、変換や要素関連づけで確認した事実を手がかりに、創造的な読み解きが進みました。横断歩道のように見えていた白黒の部分が階段状に見えたり、中央の黒い部分がくぼみや空洞のように見えたりするなど、絵の空間そのものへの意味づけが広がっていきました。参加者一人ひとりの見方が重なり合い、協同的に意味が広がっていく様子も共有されました。次回は、「くもっち」の次の場面を読み解き、物語づくりへと展開していきます。



©ひじやともえ

おわりに

今回の研究会では、オースベルの理論を手がかりに、受容学習・発見学習と、有意味学習・機械的学習の関係を確認しながら、学習者の思考にスイッチが入る授業設計について考えました。ビジュアルテキストと発問を通して、既有知識と具体的な場面を結びつけながら学びを深めていくことの大切さを共有する時間となりました。この看図アプローチ体験は、日本協同教育学会第22回大会のワークショップの構想につながるものでした。

文責：織田千賀子



集合写真